

優秀賞

『七番目の男』(『短篇集』2巻所収)

村上春樹 著、講談社、2002.

周 云想 (心理学部 心理学科 1年)

初めてこの小説の題名を聞いたのは、心理学の授業で先生が「トラウマと記憶」についてお話をされていた時でした。授業のあと、関連する本を調べているうちに偶然『七番目の男』を見つけました。「恐怖がどのように記憶に残るか」を描いた物語だと知り、心理学的な興味と村上春樹の作品が好きな気持ちから読んでみようと思いました。最初は軽い気持ちで読み始めたのに、この静かな小説が自分の心にこれほど深く響くとは思いませんでした。

物語は「私」の語りで進みます。子どもの頃、村を襲った津波で親友のKが目の前で波にのまれてしまいます。その瞬間の恐怖は心の奥に深く刻まれ、大人になっても夢に見て苦しみ、海に近づくことすらできなくなります。何年も経ってから、彼は勇気を出して再び海と向き合います。それが、過去の自分と和解する最初の一歩だったのです。村上春樹は静かな語り口で、人が喪失や恐怖に直面したときの繊細な心の動きを丁寧に描いています。

この小説を読んでいるとき、私の頭の中には「逃げる」という言葉が何度も浮かびました。私は災害を経験したことはありませんが、自分から逃げたことはあります。たとえば人間関係で誤解が生じたとき、説明するより黙ってしまうことが多く、その沈黙が相手を傷つけ、自分も苦しくなることがあります。小説の中の「私」が、再び傷つくことを恐れて海を避ける気持ちがよく分かる気がしました。村上春樹は「勇気を出せ」とは言いませんが、彼の言葉から伝わってくるのは、「恐怖に向き合うことは、忘れることではなく、受け入れて進むこと」なのだと思います。

読み終えてから、「癒し」という言葉の意味を改めて考えました。時間がたてば痛みは消えると思いがちですが、この小説はそうではないと教えてくれました。時間は傷を覆うだけであり、本当の癒しは「痛みそのものを見つめること」から始まるのだと感じました。心理学で学ぶ「共感」や「理解」にも、こうした“やさしい勇気”が必要なのだと思います。恐怖や悲しみに直面したとき、私たちも「七番目の男」のように、もう一度あの海へ戻ることができるのかもしれません。その瞬間、奇跡は起こらなくても、心は少しずつ癒えていくのだと思います。

『七番目の男』は静かでありながら、とても深い作品です。人は忘れることで強くなるのではなく、「恐れを見つめ、理解すること」で自分を取り戻すのだと感じました。誰の心にも近づけない“海”があるかもしれません。しかし、その海こそが自分という存在を形づくっているのだと思います。私にとってこの作品は、ただの小説ではなく、心の奥を映す鏡のような一冊でした。